

キリスト道講演会（東京第5回）

聖書に親しむ

2006年10月22日（東京法曹会館）

なぜ日本人にとって聖書が遠いのか

今日のテーマは、「聖書に親しむ」という題にさせていただきました。なぜ、そういう題を選んだか。どうも日本人にとって聖書という本が遠い。キリストという方も遠い。それがなんでなのだろうかと思つたわけです。

たとえば、日本人は「万葉集」が大好きです。「論語」も好きです。「般若心経」もたくさんの方がお読みになつたり愛誦あいしゅうなさいたりします。「源氏物語」もそうかもしれない。いろんな古今東西の作品に日本人は心を開くけれども、なぜか「聖書」というと、「これはちよつと……」ということ、非常に距離があるように思えてならない。それはなぜなのだろうか。こちらの側の問題があるのか、聖書の側の問題があるのか。キリスト教という宗教に問題があるのか。それを伝えようとするキリスト教の組織とか宣教師、伝道者あるいは牧師、そう

いつた方々に問題があるのか、どこに問題があるのかということ、私は考えています。

日本人ということ、これは私は決して自分から離れることはありません。決して、コスモポリタンとか、インターナショナルというのではなくて、私はまぎれもない日本人の一人である。それぞれの方が、韓国人であれ、中国人であれ、アメリカ人であれ、それぞれ自分の民族に対して誇りをもつことは当然のことです。私は決して国粹主義者ではありませんけれども、自分の民族というもの、あるいは自分の生まれ育つた所に対する愛着というものがありながら、それでいて、私は猛烈にキリストに惹かれていた。

本当にイエス・キリストという方は、私にとって唯一の、無条件に帰依きえし信頼し、その方にお委ねすることのできるお方です。「唯一の救い主は誰か？」と問われたら、「イエス・キリストです」と答えます。

このイエス・キリストという霊的人格というのは本当に凄い。その方を私のような在野の人間が——教会の牧師でもない。神学校を出たわけでもない。キリスト教を修めたわけでもない——そういう人間が、なぜそこまでイエス・キリストにのめりこんでしまったのか。今度は逆に言いますと、なぜ日本人にとってイエス・キリストが遠いのか、聖書が遠いのかということですか。

天国の告白

ガリラヤ湖のほとりで、丘に上ってそこに座して、周りをとり囲んだ群衆に語られたという、いわゆる「山上の垂訓すいくん」というのがあります。あれはなにも山上の垂訓という堅苦しいものではなくて、自分の周りに集まってきた弟子およびその周りの人たちに對して、

「天国とはこういうところだよ。今、地上は慘憺さんたんたる姿だ。苦しみ、悲しみ、悩みが絶えない。しかし、天国はこういうところだよ」

ということを告白された、そういう場面だと思う。だいたい、イエス・キリストという方にとつては高空のもとで旅をしながら、出会う人ごとに神の国のことを伝えていらつしやつた。

「空の鳥には罅わづらがある。狐には穴がある。しかし、人の子は枕する所なし」

と言われたように、本当にさすらい人であられました。何人かの人たちがイエス・キリストの身の回りのお世話をしましたけれども、決して定住の場所もない。高空が自分の屋根であり、大自然が自分の休らうところである。大自然の奥に、「父の懐ふところ」に、神さまという方の懐にいつも休らつておられた。そういうお方でした。

そういう方が語られた福音というものは、神の国の音信おとすれというものは、決してある一定の場所に閉じ込めておくようなものではなかつたはずで。ところが、だんだん教会制度というものが固まつてくると、何かひとつの宗教体系に変わつてきたように思う。やはり宗教というものはひとつの組織を持ち、教義を持ち——言い伝えと云いましょうか——そういういた

ものを持たないと次の世代に伝えられていかないから、それはある意味ではやむをえないけれども、今度はなにかそれがすべてになつてしまつて、本当の中身、本当の生命いのちがあつた時代のように生き生きと生きているだろうかということになるわけです。

それが枯渴こかつしますと、宗教改革という運動が起こります。大事なのは、外側や建物、宗教体系ではなくて、生命そのものである。この生命そのものが、どの場所であろうと、どんな所にも語られ、根付き、息づき、命していく。そういうものであるはずで。

福音書はイエス・キリストのドラマ

私たちの生命というのは実に儂はかない。長くて100年。120年までいけば最高かもわかりません。

私たちの自然の生命、寿命はそれですべてなのかと。決してそうではない。キリストは、「100年、120年の自然の生命を越えて、永遠なるものがある。私は実はそれを伝えるにやつて来たんだよ」

と。天のところをいらつしやつた靈なるキリストがわざわざ天界からくだつてきた。マリアさんに宿つて、肉体をもつてこの地上に生きられた。その方はたえず天を慕つておられた。「父よ」といつも祈つておられた。私たちは、「父よ」なんていう祈りはできない。その方にとつては、その「父」とお呼びになつたお方の御意みこころだけがすべてです。その御意に従つて歩くことがそのお方の生命だつた。それ以外に何もできない。他のことをやれと言つたつて無理

ですと。いろんな言葉や業わざがありました。病める人たちをたくさん癒いされたり、時には死人よみがえをも甦よみがえらせたりとか、不思議なことをなさったけれども、その方ご自身の自覚としては、

「自分では何もしていない」

と仰った。ヨハネ伝に書いてあります。

「自分から何もしていない。自分から何も言えない。言葉でさえ、それは父の

御業みわざである。私の中で父が行っておられる父の御業である。私は何者でもない、

本当に自分はナッシングだ」

ということに徹しておられた。だから、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と言われた。神さまの前に自分の心を本当まことに開あけて何ひとつ己おののものがない。そこに神さまというオール、全、すべてが、無限無量むりょうが宿とどった。そこからいろんなものが流れていく。それが愛となって流れていきますから、病める人ひとに手をおけば癒いえてしまう。死人に「起きよ！」と言えど起き上がってくるといふ不思議なわざが出てくる。その記録が新約聖書です。

私は、新約聖書というのは決して新聞記者が書いたような記録だと思っていない。いろんな資料から弟子たちが印象に残ったことを、ある種の意図をもってそれを再構成して組み立てているひとつのドラマだと思っています。それぞれがドラマなんです。マルコ、マタイ、ルカそしてヨハネ。みなそれぞれに、ある意図をもってキリストに関わる音信おとずれ、物語、その

言葉、そのなさった事柄、事跡、そういったものを組み立てて、こうだったということを書いている。「では、真実性はないの？」と皆さんは仰るかもしれないけれども、私たちはドラマにいくらでも涙を流すわけです。全然、実話でなくても、そこに心をうつものがあれば、我々は涙を流し感動する。イエス・キリストという本当の实在じざいの方をめぐるいろんな――あるいは伝説的なもの、言い伝えがあるかもしれない、伝承とか――そういったものをベースにしながら、イエス・キリストに関わる音信おとずれを立体的に組み立てて、そこにイエス・キリストの言葉が散りばめられ、なさった御業みわざが出てくる。また、敵対する者たちとの激しい戦いもある。そういうドラマが福音書です。

そして最後は十字架というところで終わる。しかし、十字架で終わりっぱなしではない。その方は霊体となって現れてきた。神さまの御意みこころを百%に行った人がそのまま墓はかに眠りっぱなしなんて不合理なことは絶対ありえない。現れてくる。今度は天界から弟子たちに聖霊をくだす。その聖霊を受けた弟子たちがまるでキリストが乗り移ったように、あちらこちらに伝道をして行った。使徒行伝、使徒言行録しとくというのに記しされている。そのあとにパウロが改心するわけです。

私たちは使徒たちと同窓生

あの時代のドラマというものが、私にとつてはものすごくリアルなものとして自分の中に

甦よみがえつてくる。私は皆さんにこの聖書を自分のひとつの愛読書、あるいは生命いのちの洗濯をさせてくれるものとして——只ただですよ、受信料も何もいりません。本当に只ただですから——それを自分で心の中で再現していただいて、その中に入っていたらいい、いつしか、

「ああ、自分もあのペテロやヨハネやパウロなんかと同じ世界に住んでいるな」

と感じてほしい。たかが二千年しかたつてない。地球の歴史というのはもの凄い永いものでしょ。そんな千年や二千年というのは大したことはない。同時代的、同質的にそこに生きる。

私は、弟子たちは第一期生だと思っている。キリストの第一期生がヨハネ、ペテロ、ヤコブだとかいうあの十二使徒たちです。それから後から遅れて参加したのがパウロです。これは敵対勢力だったけれども、キリストにひっくり返されて、本当にキリストのために生命を捨てた。これが異邦人伝道をやったパウロです。こういう人たちを第一期生としますと、私たちは第何期生かしないけれど、同窓生なんですよ。

ところが、ここは日本です、大和やまとです。でも、太陽の光というのは昔からずっとこの地球を照らし続けている。アブラハムのときも、このイエスのときにも、そして今に至るまで照らし続けている。そのように、霊界の太陽であるキリストは——見えません、見えませんけれども——霊的な実在者としてのキリストという太陽の光は世界中を照らしている。世界中を照らして、民族的な差別とか、「おまえさんのところは仏教国だからだめだ」とか、そんなことは絶対に仰らない。

ヨハネ伝第一章の始めのところに、

「もろもろの人を照らす真まことの光があつて、世に來た。しかし、世はそれを悟らなかつた。闇の中に光は輝いている」

と書いてあります。本当にキリストという方は一切いっさいを包み、一切を生かす方です。「仏教はだめだ、儒教はだめだ」とか、そんなことは仰らない。全部を包んで、それを全き姿に変貌させていく。決して排他主義ではない。これだけはだめだとか、決して排他的ではない。全部包みこんで生かしてしまふ。変質変貌させていく。

そして、どの時代も、どの人も現在なんです。現在、語りかけてくる。つかみかかってくる。現在、今、語りかけ、つかみかかってくるその出会い、これに触れて火花した人はその時に変わってしまう。

サマリア人

その物語が、「サマリアの女との対話」というところに出ているものですから、私はこれをひとつのサンプルに選びました。これは実に愉快的物語です。サマリア人びとはユダヤ人と交際していなかっただと書いてある。これは元は同じアブラハムの子孫です。元は同じ出ななだけども、このサマリアは、地図で見ますと、ちょうどナザレのある北のガリラヤと、エルサレムのある南のユダヤの中間にあります。これがその土地の異邦の民と婚姻して混血に

なつてしまった。イスラエルというのは非常に純血を守りますから、「他の民族と交わつてはいけない、婚姻してはいけない」という。なぜかといいますと、そのどの民族も神さまを持つています。多くの場合、偶像神を持つています。そういう偶像神に心を寄せて、「ヤハウェー」と呼んだあの神さまに対しての純粹な忠誠が破られる。「宗教的姦淫」という言葉で呼ばれています。それは絶対にだめなんです。モーセの十戒の第一番目に、

「私以外の何ものも神としてはならない」

とあります。これは「ならない」ではなくて、

「おまえたちにとつては私以外の神なんかあろうはずがない。一対一だろ」

ということですよ。こういう一対一の信愛関係だった。しかも、

「いかなる形も造つてはならない。靈なる神は靈なる神として拝め」

と言うんですから、これは昔の人にとつてはとても難しい要求だと思えます。何か形を造りたい。建物も欲しい。祭壇も欲しい。すべて自分でコントロールできそうなものが欲しいのが人間性なんですけれども、イスラエルの神さまは「絶対に造るな」と言う。それから、

「みだりにわが名を呼ぶな」

と仰る。気安く呼ぶなと。だから、彼らは「ヤハウェー」と呼んだら畏れおおいというので、「アドナイ」（わが主）と呼んだ。そして、「ヤハウェー」という名前を忘れてしまつて、もう一度復元するときに、何か母音と子音のつけまがいので、「エホバ」という名前ができた

ということですよ。だから、「エホバ」という名前は、「ヤハウェー」という「実存神」、神中の神、「有りて在るもの」、永遠に在いましたもう方、しかも、在りつつ他者を在らしめる、生命づけるという「ヤハウェー」という名前なんです。「実存神」です。それと「わが主」と、この二つが付いて「エホバ」という。それで小池辰雄はそれを「実存主」——実存神にして主なる方——と言つて、「エホバ」という名前はなかなかいい名前だよ」ということを仰いました。

そういう神さまですよ。ところが、このサマリアの人たちは周りの異民族と婚姻して、いわば宗教的な純血を汚したというわけでイスラエルから排除された。イスラエル人は絶対に交際しない、口もきかない。ところが、イエスという方は全然そういうことにこだわっていない。

まあ、福音書を見てごらん下さい。ルカ伝でもそうです。だいたい、褒められていたのはサマリア人ですよ。ユダヤ人はだめなんです。ユダヤ人というのは「パリサイ人」とか「サドカイ人」とかいますけれども。パリサイ人というのは律法に凝り固まって他を審く。己を高くしとする。「自分たちは律法を守つています。あいつらはだめだ」と他を退けさげすむ。そういう傲慢の靈にとりつかれていような存在ですよ。サドカイ人というのは、「靈なんかあるものか」と言っている知性派なんです。ところが、イエス・キリストはそのユダヤ人の律法主義者とかそういう者たちから異端視されます。それでいつも、サマリア人に対してはものすごく温かい目で見ている。「良きサマリア人」の話とありますがね。あれもそうです。

また、「十人の癩病人」の話もあります。十人の癩病を患つていた人がイエス・キリスト

のところへやってきて、「助けてください」と言ったら、イエスは何もなさらないで、「さあ、今から祭司のところへ行って、身体を見せなさい」

と言われた。身体を見せて、きちんと治って癒えていくという証明書をもらったなら、自分たちの仲間に帰っていきける。それまで隔離されているんですね、癩病というのは。だから、「さあ、行って、祭司に身体を見せなさい」と。それで、十人が行く道すがら癒された。そうすると、たった一人がすぐ引き返して、神を讃えながらイエスのところへ帰ってきたというお話があります。それがサマリア人であった。イエスは言われた、

「十人潔められたはずではないか。しかし、十人のうち神を讃えて帰ってきたのはあなた一人なのか。サマリア人のあなただけなのか」

と。そのように非常にサマリアという、ユダヤ人からは排斥されている者に対してイエスはそのすぐ温かい目で見ている。民族で見えない。心を、人らしい人を見ている。宗教の故にゆがんでしまっているユダヤのあり方をキリストは排斥して、本当の人間性を回復して、「人間らしい人間であれよ」

サマリアの女との対話

それがヨハネ伝4章の「サマリアの女との対話」の中に出てくるので、皆さんと味わいた

いと思います。

「さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、

2——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである——

3 ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

地図を見ますと、ユダヤは南の方で、しかも山岳地帯です。それに対してガリラヤというのは、のどかな田園地帯で緑豊かな場所です。そのナザレでイエスは育たれた。ガリラヤ地方にたびたびいらつしやつた。そして時々エルサレムの方へもおいでになった。このお話はエルサレムのあるユダヤの方からガリラヤへ戻ろうとなさったその途中の旅の出来事です。多分、お天気がよくて暑かったんでしょう。夏の真昼時と思っていたください。

4 しかし、サマリアを通らねばならなかった。5 それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。6 そこ

にはヤコブの井戸があった。」(ヨハネ4:1-4)

イスラエルの人たちにとっては、井戸というのはものすごく大事です。井戸をめぐる争いもしばしば起こる。水をめぐる争いです。ヤコブは、長い話になりますけれども、創世記に出てきますが、エサウと喧嘩して——エサウは長男なのに弟のヤコブは長男の権利を奪い取ってしまった、それで恨まれて殺されそうになるので——北の故郷へと旅立っていく。そ

して、故郷へ来た時に井戸ばたで水を汲んで家畜に与えたりして助けてやる。水汲みにきた女の子の中にラケルという女性がいて、それが彼の奥さんになる。そういう、井戸をめぐってロマンスが展開するわけです。

これはそこでの話ではなくて、ヤコブが自分の愛する子供のヨセフに与えた土地の近くにそういう井戸がある。シカルというサマリアの地にヤコブの井戸がある。このヤコブの井戸というのは素晴らしい井戸のようです。深い井戸で、その地方の人たちはこの水を汲んで、ずっと長年生活をしてきたという由緒ある井戸のようです。その井戸のそばにイエスも旅に疲れてやって来た。神の子は疲れないかという、決してそうではない。やはり彼も人の子ですから、お疲れになった。

「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ころのことである。7サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。」

ここからがイエスの本領発揮ですよ。私は関西人ですので、関西弁で言うと、イエスは「ねえ、あなた、そうおっしゃるけれどさ、わたしって誰か知ってる？ あんたが

もし神さまの賜物たまものというものを知っていたら、あんたの方から、それを欲しいときつと願い出るんだよ。わたしの正体がわかるかい？」
と、こう聞かれたわけです。

永遠の命に至る水

10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、この私がどんな存在か、それを知っていたらあなたの方から飲ましてほしいと頼むはずだと。あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことである。」

自分は生きた水を、あるいは命の水を与えたことであろうと。そこで、

11 女は言った、「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」

「主よ」というのは「だんなさま」というぐらいでしょうね。

「あなたはいつたい、汲む物も持っていないではありませんか。この井戸は深いんで

す。どこからその命の水を、生きた水を手にお入れになるおつもりですか。聞きま
すけど、私の先祖のヤコブというのは偉い人なんです。ヤコブもこの井戸から飲ん
だ。その子々孫々にいたるまでこの井戸から飲んだ。それで私たちは今日まできて
いる。あなたはいったい何者なの？」

と、こういう感じでこの女は言った。非常に正直でしょ。この女の誇り高いというか、胸を
はつて「ヤコブはねえ」と言っているのが目に見えるようです。「わたしたちの父ヤコブ」
と言ってます。何もお父さんでも何でもない先祖の人なのに。しかも、血筋もつながって
いるかどうかもわからないけれど、いつのまにかヤコブを「父」なんて呼んでます。

13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14しかし、
わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内
で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

びつくりするようなことを聞いたものだから、この女性は、

「えっ？ 決して渇かない？ その人の中から水が湧き出る？ 永遠の命に至る水
が湧き出るとは何のことだろう？ とにかく、水を汲まなくてもいいそうだ」

と。毎日毎日、水を汲みに来なければならぬ労働が大変な重労働なんです、女の人にと
っては。これは助かるわと思っただけでしょう。だから、

15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここに汲みに来なくて

もいいように、その水をください。」

「これはだめだ」とイエスは思われて、「話にならん。だんなを、夫を呼んで来なさい」と。

16 イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、

17 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「夫
はいません」とは、まさにそのとおりだ。18 あなたには五人の夫がいたが、今
連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」

「あつ、そうだよ。あなたはかつて五人の夫がいたけれど、みんな別れてしまつて、
今一緒に暮らしているのも正式の婚姻をしていない。そうだよ」

と言われた。そしたら、その女の人はもうたちまち態度が変わりました。

「あなたは預言者です。私の過去を言い当てた」

霊と真理をもって父を拝する時が来る

19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20 わたしどもの先
祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべきは場所はエルサレム
にあると言っています。」21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。
あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。
22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているもの

を礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。²³しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。

「霊と真理」というところは文語訳では「霊と真^{まこと}」と書かれている。私は「霊と真」の方が好きですね。つまり、全存在をかたむけて——誠心誠意と言いますか——全存在をかたむけてそのお方を拝する。そういうときが来るんだと言う。

今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。²⁴神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。」(ヨハネ4・6〜24)

これは本当に私は素晴らしいことだと思つてます。宗教というのは特定の場所を指定いたしません。特定の神殿、教会、エルサレム本山に巡礼の旅をしたりする。けれども、イエスが言つておられることは、

「そういう所はひとつの手段としての意味はあるだろう。そこへ行けば、心は何か清くなつて、礼拝するのが普通かもしれない。けれども、それは本質的なことではない。神さまは宇宙の神さまだ。天地万物を創造なさつた神さまは霊なるお方である。霊なるお方は、人が造つた宮にお住みになるようなお方ではない。そこを宮だと言うから、仕方なしにそこにおいでくださるけれども、本当は宇宙を住まいとなさつておられるお方だ。そのお方は霊なるお方であるから、しかも、あなた方一人ひと

りは霊的存在だから、霊と霊が結び合う、火花する、そういう向かい方、これは場所の限定がない。時の限定もない。今どこでも即座にという、これが本当に神さまが求めておられることだ」

と言う。正に革命的宣言です。私はここが大好きです。それぞれがそれなりの意味をもちます。意味はもちますけれども、そこにこだわってはだめです。こだわってそこが絶対だというふうに絶対化すると、宗教戦争が起こります。そうではない。それらはそれなりの意味を、相対的な意味をもつけれども、それにこだわらないで、常にそこを破つて宇宙空間に旅立つていく。そこは大空のもです。神さまを大声で讃美する。本当に大声で、

「主よ、御名を讃えます！」

と、はらわたの底から言えばいい。「神さま、ありがとう！」と。それでいい。子どもなら、「お父ちゃん、ありがとう」でもいい。何でもいいんですよ。はらわたの底から讃美します。感謝します。「ありがとうだけです。何となれば、あなたがいらつしやうなければ、私は生きてられないからです」と。

いづくにありても、いついかなるときも

私という人間というのは、顧みたら、100年の命しかありません。それも100年を保証されているわけはありません。明日ひよつこりいなくなるかもしれない。私ももう74歳になり

ましたので。自分を顧みれば、100年生きるなんていう保証はどこにもない。明日何が起っても不思議でない。しかしながら、この命をいただいている間、毎日生き生きと感謝して命にあふれて生きたい。地上の命の終りが決して私の生命の終りではない。本当の生命、キリストと同じようなこの素晴らしい霊をいただいて——霊の体からだ、キリストの復活体です——霊の体をいただいで永遠に生き続ける。キリストが待つていてくださる。パウロたちもみんな待つていてくれる。そういう世界が用意されている。

そういう者たちが礼拝する場所というのは特定の場所でもなければ、特定の時でもない。それは人間ですから、日曜日は今でも聖なる日、「聖日」と呼んでいます。ユダヤ人は土曜日「安息日」で、この日は労働してはならないとされて、律法化されてしまいました。本当は安息日というのは、人間の業わざを休んで、ただ神さまの恵みだけに生きるという日です。六日間は一生涯懸命に自分の糧を求めて精いっぱい働いています。「働かざる者食うべからず」で、本当に大変ですよ。でも、

「安息日だけは安心して神の懐ふところに憩え。神が養いたもうから」という、それが安息日だった。人が安息日のためにあるのではなくて、安息日は人のためにある。キリストは、

「安息日に人は家畜を連れ出して水を飲ませてやるだろう。安息日に病んでい
る人や苦しんでいる人を祈りをもって癒いやして何が悪いか。神は今にいたるまで

働きたもう」

と言われた。その神の働き、愛のお働き、生命を与えるお働き、それを受け入れるのが人の役目だ。ウィークデイは神さまを放ほうつておいてガツガツ働いている。けれども七日目はすべての業わざを休んで神さまの懐なごみに休らいたさいと。これが本当の安息日です。ところが、

「安息日は働いてはならない」

という法律にしてしまった。そして、働いているかどうかたえず監視している者がいた。

「何マイル以上は歩いてはだめだ。麦の穂をつむのはだめだ」

とか。そんなことになっていたときに、イエス・キリストがそれを破られたわけです。

それから今度は、クリスチャンたちは、日曜日は主よみがえが甦よみがえられた日だと言つて——キリストは金曜日に十字架につけられ、日曜日の朝に復活した。あれは死体が生き返ったのではなくて、本当に霊化されて霊体となつて現れてきた——それを記念して日曜ごとに礼拝をするようになった。これを「聖日」聖なる日と呼んでいる。でも、この聖日もまたいつのまにか律法化されまして、聖日に何かしたら罪なんだろうとか、聖日に教会へ行かなかつたらやましいのだろうかとか——まあ、行くにこしたことはありませんけれども——あまりそれにとらわれてほしくない。やはり、

「いざこにあつても、いついかなるときも」

という、このヨハネ伝の精神です。神はいざこにあつても、むしろ誰にでもそばに来てくだ

さる。我々がどこかへ行つて礼拝するのではない。向こうの方からおりてきて、「おまえと一緒にいて離れないよ」と言われる。これがキリストの福音なんです。だいたい、神さまというのは上から降くだつてくる神さまです。くだらない神さまは「くだらないね」という（笑）。本当にくだつてくる神さまなんです。モーセにもそうでしたよ。向こうから語りかけてきて、

「モーセよ、モーセよ。おまえをつかわすから、エジプトで苦しんでいるイスラエルの民を助けよ」

と言つて、たえず向こうから迫つてくる。モーセは、

「いやあ、勘弁してください。私は何もできません」

「だめ、だめ、だめ。おまえを使うから」

と言つて無理やりにつかわす。そういう働きかけてくる神さまです。キリストもそうなんです。キリストというお方は我々と神さまの間を隔へてて隔へてを全部とりはらつて、

「安心しろ。この霊まことと真まことをもつて礼拝することを安心して行えるように、私は全部そなえをするから。私はおまえのところへ降くだつてくる」

と言われる。

聖霊を一人びとりにくだす

事実、キリストは天界へ昇られてから、あのペンテコステという五旬節のときに聖霊をく

だした。火のごとく降つてきた。あれがキリスト教会が生まれた記念日なんです。火の如く聖霊が降つてきた。キリストの霊、「助け主」です。この新共同訳では「弁護者」と書いてあるが、私はあまり好きではない。「助け主」でいい。「慰め主」、それがキリストの霊です。私から言うと、キリストの分霊です。キリストという霊的な実在者が自分の分身としての聖霊を一人びとりにくだす。このお方が宿られるならば、もう天地の間にパイプができてしまう。パイプが、きずなが結ばれる。その聖霊という方がたえず私たちを祈らせてくださる。祈りの霊ですよ、聖霊というのは。無条件にその方が私たちのところに来てくださるんです。それがこのヨハネ伝のここに言われていることが成就している姿です。霊まことと真まことをもつて拝する。時と所は問わない。時代も問題ではない。だから、そういうふうには日本の方々にこの聖書を受けとつてほしいんです。先入観を捨て去つて、受けとつてほしい。「いや、あれは奥田流ではないか」と言われてもかまいません。私はキリストのためならはりつけにされても結構だと思つてますのでね。本当にキリストは呻うめいておられると思う。

「なんでこの私の愛を知つてくれないのか。私のこの熱い思いをどうして受けとつてくれないのか。日本人よ、あなた方は他の文化は全部吸収する。うまく利用して自分のものに仕上げる。すぐく加工は上手だ。ところが、なぜ、私自身だけを拒絶きょたつしているのか。私はおまえたちのところに住みたいのに」

と。日本は八百万やおよろずの神々に礼拝した。仏教も伝来した。いろいろなものが入つてきて、それ

を全部日本的に加工して日本文化の源にした。けれども、キリストだけは敬遠してしまった。もう残念でしかたがない。きつと天界で歎いておられると私は思っている。

そのように礼拝のことを言われた。そして、この女の人は何と言ったか。

「²⁵女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。」

「メシア」というのは「油そそがれたる者」「救い主」ということです。「キリスト」というのがだいたい、「油そそがれたる者」という呼び名ですから。

その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」

天地宇宙や神さまの世界のことを全部話してくださるはずですよ。この女はよく知っています。

²⁶イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

遠いところに求めるのではなくて、今こうやって話しているではないかと。すると、この女はびっくりして、水を汲みにきたのにその水がめを置いて、パッと町へ走って行った。イエスも、「おつ、水がめを…」と言われなかった。私はこういうところが大好きです。

見えるイエスの奥に見えない霊的人格が

²⁷ちようどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておら

れるのですか」と言う者はいなかった。²⁸女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」

「五人の夫がいたとか、身の上を全部当てられた。だから、来てください。ひよつとしたら、この方がメシアかもしれません」と。これはけしからんですよ、「私はそれなり」とキリストは言っておられるのに。「ひよつとしたら、この人がメシアかもしれませんよ」と、割り引きて言いました。

³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

ここが素晴らしい。このサマリアの女がどういう身持ちの人かしません。五人も夫がいて今は別の人と住んでいるんだから、あまり褒めた人ではなさそうなんですけれども、町の人々はこの口八丁手八丁にのせられて、ぞろぞろとやって来た。これはすごい実行力です。

³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。³³弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。³⁴イエスは言われた。

「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業わざを成し遂げることである。」(ヨハネ4・25〜34)

こういうところがイエスのイエスらしいところですよ。だいたい、サマリアの女に「水を飲ませてくれ」と言われて問答しているうちに、もう水のこととはどこかへ行っちゃったでしょ。女は水がめを置いて向こうへ行つてしまいました。だから、水も飲んでない。おなかもへつているはずですよ。弟子たちが食物を買いに行つた。やつと買って戻つたら、

「私にはおまえたちの知らない食物があるんだよ」

と言っているわけです。それは何か。

「御心を行うこと、これが私の食物である」

と。イエスという方は時々、弟子たちが面食らうことを仰る。マリアさんもだいたい面食らつた。これは仕方がない。天界から来た人というのは半分地上の生活をしながら半分天の人ですよ。ところどころ波長があわない。それで不可思議なことをなさるといふ存在なんです。

こうやって皆さんと一緒にお話をしていますと、本当に楽しいわけですね。だいたい、キリスト教のお話は、固苦しいお話はだめですよ、楽しくないと。聖書学者は単なる歴史とか、考古学によればとか、聖書学によればこうであつたとか、人としてイエスはこうであつたとか。そのようにすべて神話的要素と言いますか、キリストの奇蹟は全部単なる言い伝えであり、単なる物語であるとして排して、イエスという人はそんな人ではなくて、イエスを丸裸にして、我々と同じ次元にひきずりおろして、これがイエスだと言う。そこに何が浮かび上がるかというのと、

「イエスは情け深い人であつた、優しい人であつた、同情深い人であつた」

とか、そういうふう人間レベルにひきずりおろしてしまふ。

目に見えるイエスはそうかもしれない。目に見えるイエスの奥に、見えない本質がある。その本質を福音書はいろんな事柄をとおして伝えている。そこに我々がぶつかつて、我々自身がいエスから直接つかんでいただいて、その霊をいただいて、ツウカーの間柄になりますと、そういう偉い先生方や学者の方が言つておられることが実に愚かであるということがわかります。歴史的に考古学的に調べ上げて、「これがイエスだ」と言つても、「ああそうですか、ただそれだけです」と、これで終ります。

正に弟子たちやいろんな人が驚いたその本質的存在が、これが霊なるイエスなんです。見えるイエスという人の奥に、見えない本当の霊なるキリスト、霊なる人格——霊的人格と言つておきましょう——それが隠されている。それに気がつく人はさいわいです。そのお方が語りかけているんです。

一対一の対話になつていく

イエスが十字架上で息を引きとられた。正に死人となられた。しかし、その後には本当の本質が現れてきた。これが復活という魅^{よみがえ}りの事態です。これはイエスの隠された本質^{あらわ}が露な姿で現れた必然の姿にすぎないんです。この現れてきたイエスは実に自由自在です。エマオ

で現れるかと思うとまたここに現れる、また次にあそこで現れるというふうには自由自在に現れてきた。四十日間、地上で出没自在です。それから天へ昇っていかれた。

「ボカーンと天を仰いでいるのではないよ、やがておいでになるからね」

と天使たちが告げた。実に楽しい話が福音書や使徒行伝なんかに出てきます。その一つ一つの記事や出来事が本当であろうが、言い伝えであろうが、そんなことはどうでもいい。

「湖の上を歩いてこられた」

という。キリストぐらいの人なら湖の上を歩いてきたって不思議ではない。ところが、それを頭で納得したい方は、

「あれは復活されたキリストが、霊なるキリストが歩いてきたのを、弟子たちは生

きておられたキリストにすり替えたんだ」

という説明をする。説明したら納得できるかしらんけれども、私はちつともありがたくない。

弟子たちが湖の上で暴風雨にみまわれて沈みかかって大変な時に夜明けの4時頃、キリストは波を踏みしめながら近づいてきた。ぼーっと明かりが灯っている。弟子たちが幽霊かと思つたら、キリストは、

「私だよ」

と言った。ペテロは喜んで、

「あなたですか、御許みもとに行かしてください」

「きたれ！」

と言われたらペテロは歩いて行つたとある。ところが波と風を見て恐れて沈みかかった。

「ペテロよ、なんぞ疑うか」

と言つて捕つかまえて舟に乗り込んだ。すると嵐は静まつたという。実に愉快ではありませんか。私は法律学者として申します。信ずるとおりになるんです(笑)。「信頼の原則」というのがある。所有権のない人から物を買ひ取つても、その人が所有権者らしくみえていたら、権利を取得するという制度が民法でいくつも用意されている。それは、そこまで信頼するんだから守つてやろうじゃないかというわけです。ましてや、福音書に書いてあるそういういろいろな出来事、これを私のようにそのまま受けとると、

「あいつがあそこまで正直に受けとつているんだからそれを担保たんぽしてやろうじゃない

いか、恥をかかしてはまずい」

と、神さまの方で応援してくださいますよ。だから、その福音書に書かれていることが歴史的事実であろうとなかろうと——いろいろな奇蹟みわざの御業みわざがですよ、十字架は本当の事実ですけども——他の御業が事実であろうとなかろうと、記事に少々食い違いがあるうと、そんなことはどうでもいい。大事なことはそこをとおして語りかけている神の語りかけです。「おまえはこれをいかなるものとして受けとるか」ということ。

「湖の上を歩いてこられた。ああうれいなあ。私が困っている時にそのように現

れてくださいよ、私が SOS したら来てくださいいね」
 「よし、わかった、つかまえたぞ」

という、そういうドラマとして自分の中に再現してみる。そうすると、キリストは、
 「そうだ、そのとおりだ。私はおまえにくつついて離れないぞ」
 と言つてくださる。こういう一対一の対話なんですよ。

たまたまサマリアの女とイエスとの一対一の対話がここに成り立っています。弟子たちもいない。弟子たちは、「なんだこの女は。この女の人と何か会話しているな」と言うだけだけれども、この女の人にとっては大変な体験をした。それで町中の人を連れてきた。

じかじかに会おうキリスト

「³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、

このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であるとわかったからです。」(ヨハネ

4・39〜42

町中の人々がやってきて、何とその後、イエスに留まつてほしいと、旅しておられるイエスを引き止めて、二日間イエスにサマリアの町に留まつてもらつて、ずっと話を聞いた。そしてたくさんの人が信じるようになった。すごいですね。ユダヤ人からは完全にシャットアウトされて、異邦人扱いにされて、さげすまれていたサマリアの人たちは、自分たちが本当に生なまの目でイエスを見、話を聞き——きつかけはサマリアの女ですけれども——今度は自分たちが生なまにイエスという方**に**ぶつかり、話を聞き、そして最後に何と言つたか。「もう、私たちがこの人を信じているのは、あんたが紹介してくれたからではない。あんたが言つたからではない。自分たちがじかじかにこの方から話を聞いて、そして本当にこの方こそ救い主だと信じたからである」と、そう言い切つていゝんですね。これなんですよ。

私たちが宣教師から聞いたのではない。どこその牧師から聞いたのではない。宣教師や牧師の話もちろん、きつかけとなつていゝんですよ。それを言つてくれたから聖書を読み出したりいろいろあつたけれども。それがきつかけとなつて、今度は自分たちがじかじかに霊なるキリストに、見えないけれども霊なるキリストにぶつかり、その方から声をかけていただき、その方の言葉を魂の糧として食べ飲み、生き生きと生きるようになった。希望が湧いてきた。そうやって一人ひとり**が**自分の家に祭壇を持つ。といつたつて、何もなくていい。

「あなた方自身が宮である」

と書かれています。パウロの言葉の中に、

「あなた方自身が神の宮である。それだから、あなた方の身体を穢^{けが}してはならない。あなた方の身体を清いものとしなさい。そこに神さまがお宿りくださる宮だから」

とある。それは個人でもあるし、また同じ信徒の集まり、それも宮です。それが本当のエクレシアなんです。そこにキリストの霊がとどまっておられる。

霊が止まる存在が霊止

「だいたい、「ひと」というのは——小池辰雄先生が言っておられました——「霊止^{ひと}」、「霊が止どまる」と書く。『大言海』に書いてある。霊が止まる、神霊がとどまる存在、これが「ひと」という。ところが、現代は神霊が全部出て行ってしまいました。神霊が全部出て行ってしまつて、全く日本の現代の人はこの霊、特に神さまの霊の次元に対して無感覚になりました。けれども、他の霊に対してはわりに、江原何とかさんなんていうのによく見ていただいたりとか、細木何とかさんに見てもらつたりとか、そつちの方は非常に感覚があるけれども、本当の神さまに対して心を開こうという点がどうも失せていますね。

昔の人は、霊が止まる、神霊が止まる存在、「万物の霊長」と言った。これが人間の尊厳です。それが切れてしまった。それを元へ戻して、回復しないとイケない。それが今、必要です。

私は、あの教育再生——安倍首相が呼びかけて、教育再生会議なんかをたくさん的人数を集めてやりましたね——教育の再生なら、本当に人らしい人に戻る、人らしい人になることだと思えます。まず先生、親、それから社会の大人たちが本当に真の神さまのところへ立ち返ることです。

「自分たちは神を神ともせず、^{おのれ}己がまるで偉いように、地球を支配するように、宇宙を支配するように思い上がっていた。大変なまちがいでした」

と。そう言つて、大人たちが、先生方が、親たちがみんな自分から本当に生まれ変わる。そこから新しいことが始まる。その姿に子どもたちが心を打たれる。

「子どもたちは親の背中を見て育つ」

と昔から言いました。親自身、大人が変なことをしていて、立派な子どもが育つはずがない。しかし、あの教育再生会議で誰もそれを言わない。「いやスポーツをやりましょう、教師の資格認定をやり直しましょう」とか、うわべのことばかりやっている。

本当に日本人は昔から非常に信仰深い民だつたと思う。山には山の神さまがいる。海には海の神さまがいる。山奥深く入っていけば神々しい気持ちになりますよね。伊勢神宮だつてそうです。非常に神々しい雰囲気があります。そういうふうにな宗教的な感受性はある。あるんだけど、「この宇宙を創りたもうた神? そんなものはあるものか」と、これで終りなんです。そうじゃなくて、

「そのお方は本当に人を愛して、我々と神さまとの間を隔てていたものを打ち破る。そのためにも御子キリストをつかわした」

という、これが福音でしょ。御子キリストをつかわした。そしてキリストが道となってくれた。さつた。そういうところへなんとか立ち返ってほしいと、こんなふうに私は願っております。

文語訳聖書と新共同訳聖書

私の話はどこで切れてもよろしい。皆さんが何かそういう雰囲気を感じとってください、
「これは自分も聖書を読もう」

と思ってくださいれば、それで目的は達するんです。「聖書」というと、私は日頃は文語の新約聖書に親しんでいる。けれども、やはり今は新共同訳というのが一応、日本で共通の聖書とされていますので、今日は新共同訳から引用させていただいたわけです。たしかに新共同訳聖書はいろいろ工夫をこらして親しみやすく書かれているけれども、ところどころやはりもの足りないというか、ちよつとひつかかるところがある。たとえば、

「私は平安をあなた方にのこしておく」(ヨハネ14・27)

というヨハネ伝の言葉がある。「平安」ということ。ところが、それを「平和」と訳しなおしてしまっている。これがひとつ残念なことです。小池辰雄先生は、

「平和というのは人と人との関係で、それが安らかである関係を平和といい、神さ

まと自分たち人間の縦の関係における安らかさは、平安というんだ。日本には平安

神宮というのがあるじゃないか」

と言われた。平安の都という。「平安」という言葉は日本にもずつと親しくしみ込んでいるわけです。かつての文語訳の聖書は、「平安を与える」と書いてあります。それから、「助主たすけぬし」「パラクレートス」という。これは「弁護する者」というのが原語ですけれども、「弁護者」というとなにか法廷用語のように聞こえます。それから、「助け主」という方が私には慣れ親しんだ言葉だなどという気がいたします。それから、ヨハネ伝の言葉の中で、

「私につながっていないさうい

というのがある。「つながっている」という、これは葡萄の木と葡萄の枝がつながっているという関係だからそうなんでしょうけれども、文語訳では、

「我おに居おれ」(ヨハネ15・4)

「あなた方が私の中に居るならば、そして私があるあなたの中に居るならば」

という、「居る」という単純な言葉を使っている。それを

「私につながっているならば、私と結ばれているならば」

という、なにかまどろっこしい感じがいたします。ここにいらつしやるご年配の方々は文語も抵抗なくお読みいただける方だと思いますので、新共同訳と文語訳の聖書を照らしあわせながらお読みいただければいいのではないかなと思います。私もできだけピューラーな新共

同訳を活用したいと思つていますが、そんなことをちよつと感じるんですね。特に、「詩篇」とかは、文語訳はリズムがあります。リズム感という点では文語訳聖書というものはなかなか捨てがたいものがある。そういう感じを受けています。

命懸けで神の言をくらつて生きる

私がこういう講演をしたりする。自分は何ものなのかと思う。私にはある種の抵抗が続けてきたという感じがあります。何に抵抗してきたのかというと、分業制度に対する抵抗です。世の中はすべて分業ですよ。分業は結構ですけど、神さまのことまで分業にして、お祈りしたり聖言の研究をするのはある特定集団の方々にまかせて、

「あなた方はせいぜい働きなさい。日曜日にやつてきなさい。いろんな儀式やミサを受ければ、それで充分です」

と。これで果たしていいんだらうかと思う。本来の姿は、人は一人びとりが命懸けで神のことばをくらつて生きることです。

皆さん、私たちは娑婆しゃばで生きているときは本当に命懸けでしょ。労働基準法も何もあつたもんじゃやない。本当に必死になつて働かないと生計を養えない。身体を養えない。それくらい一生懸命になる。よい学校に入らうと思つたら一生懸命に塾に行つたりして、「寝るのは4時間だよ」と言っている人もある。それぐらいこの世のことに関しては命懸けでやる。と

ところが、神さまのことになると分業だという。「あなた作るひと、わたし食べるひと」と、もし分業したら大変なことです。やはり、大事なものは一人びとりが自分で摂取する。水、空気、食物、そういったものが身体にとつて必要なように、霊の生命、霊の糧、魂の糧、これは一人びとりが命懸けで求める。それが人間の本来の姿だと思ふんです。

ところが、その求める求め方が難行苦行の修行を要するようなら、これはお断りですということになるけれども、キリストの福音というのは、さつきのサマリアの女との対話でわかりますように、出会いなんです。出会つてその日のうちに、たった二日でサマリアの町の人たちがみな信じてしまった。しかも、強いられてではない。心から信じたという。そういう世界です。

私は、日本の方々は実に心のやわらかな人々だと思います。そういう方々が本当に聖書に心を開いていただきたい。分業ではなくて、どの職業にたずさわれようと、どの道に進まれようと、スポーツマンであろうが、学者であろうが、芸術家であろうが、どなたであつても、生命の糧は万人に等しく必要です。他人が代わることができない。

法律の方でも「代理」という制度があつて、これはしかしながら代理できないものがある。婚姻というのは代理できない。これはやはり当事者同士が共同生活をしないと、代わりにというわけにいかない。運転なら誰か代理できますよ。車を離れたらすぐに駐車違反でつかまつて召しあげられるという。この頃は道路交通法が変わつて、そんなことになるから坐つてま

しようというように代わってみたりとか。飲み屋に行つて飲んだら、代わりに私が運転しますよと、代行というのがある。ああいうのは他人ができませんけれども。この自分が生命を得るといふこと、自分が生きるということ、これは誰も代われない。各人が命懸けでやるべきことなんです。

しかも、キリストは、

「誰でも無条件だよ」

と言つてくださる。まず、「無条件だよ」と言われたら、「そんなものはバカバカしい」と思つてみんな相手にしない。「百万円積み、一億円積み」と言つたら、命懸けで積むんですよ。ところが、「無条件だよ」と言つたら、「いいや、また今度」と言う。これが日本人というか、人間性なんですね。

でも、皆さん、空気はいつもただで吸っているではありませんか。寝ている時だつて空気は吸つていらつしやるではありませんか。しかも、空気は自分でつかめない。空気が皆さんを包んで、皆さんの身体の中にしみ込んで、そして皆さんの血を清めていく。お水もそうです。その他本当に大事なものは無条件です。山の中へ行けば、水はまだ只でいただけです。無条件で必要なものは備えられている。肉体的な絶対必要なものと、それから、霊なる霊止としての絶対必要なもの。この二つを同時に摂取する。これが私は人間だと思ふんです。

「全人」という言葉があります。分業ではなくて、すべてのことを全部やるという。レオ

ナルド・ダ・ビンチか何か知りませんが、そういうのは私は思つていません。それぞれ天賦天職というのがありますから。学者は学者らしく、お医者さんはお医者さんらしくという、それぞれの道において一生懸命になさると同時に、人という面においては職業の区別なく、主婦であろうが、高齢の方であろうが、どなたもみな、人であるかぎりたえず必要なものを求め、他人に代わってもらわれないという、その生き方をしみこませていただきたい。そのために私は学者だけでも、やはりこの聖書にいくつこうと思つたんです。

キリストによつて新しい生命をいただいた

私は24歳のときに人生に生き詰まり、悩みの中でキリストという方を教えてもらった。それから50年になります。小池辰雄先生にそれから3年後にお会いすることができました。先生の書かれた著作とかお話とか、そんなものを一生懸命に吸収して、そして、どんなに苦しいときでも集会はやめないといいことを貫きました。40歳のときから家庭集会を始めました。そして、今も本当に小人数ですけれども、日曜毎に集まつております。月一回は東京へ来て、新宿集会の方々と一緒にお祈りをするという機会をいただいている。

はつきり申しまして、私は、職業人として、これをやるのは本当に自分としては大変でした。法律の本を書かねばならない。集中してこもつてやりたい。しかしながら、こつち(キリスト)の道がある。この二つの、本当に二足草鞋で自分は今できるのかなと、何度もなにかある

種の壁を感じて、ひるみそうになったことがあった。それでも、私はそれを貫こうとした。それはなぜかという点、24歳で私の命は一旦終わったと思つた。地上の命は24歳で終わつて、キリストによつて新しい生命をいただいた。そのいただいた生命というのはキリストに献げた生命であつて、学問しようが何をしようが、

「キリストの御意みこころにかなうならばそれをしよう、キリストの御意ならば」

という、それがいつも付いている。その中で、御意にかなうならばこれこれをしようということでしたので、本を書くにしても何にしても、それが常にあるわけです。

ですから、私は決めたんです、量を減らそうと。人が本を5冊書くなら、私は1冊でいいと。しかし、そのかわり1冊に全魂をこめて祈りをもつて書こう。人が1年で書くならば、10年かかつてもいいと。そう思つて、『債権総論』に打ち込んだ。私はものすごく忙しい。しかし、私は普通の職業の方々とは違う立場にあるんだから、それは言い訳にならない。出版社には、「すまんね、いつまでもすまんね」と言つて、いつも謝りながら、「原稿は、待つてください、ちよつと待つてください」と、今でもそうです。謝りながらですけれども、しかしながら、私はそれしかない。それで二足草鞋わらじがいつのまにか一つになつてきた。そんなに苦しくなくなつてきたんです。

こうやつて皆さんにお話する時でも、私はめちやくちや準備なんかしません。日ごろ思つていることを、少しこんなことも話したいということをもメモ程度にちよつと書く程度で、もう自分の中から溢れ出るものを皆さんにお話すれば、それで充分ではないか。私の中でキリストが働いて告白してくだされば、それで充分ではないかと思つています。キリストは、「おまえではないよ。私がおまえの中で、言うべきことをちゃんと知らせるから心配するな」

と。何かふてぶてしさと申しましようか、開き直りというか、それが出てきた。それが出てきて日曜日にお話しますと、聞いている人がみな楽しいと言ひ出してくれた。それまでは何か窮屈で、聞いている方も肩が凝るといふか、そういうことだったようですけれども、最近は、みんな楽しいと言ふようになってくれた。それから、授業だつて、楽しいというふうになつてくれた。やはり、それはまあ歳も、年季が入っているからなんでしょうけれども。

与えたくて仕方がないお方

私の小さな抵抗は、分業ではないということ。本当に一人びとりがどの職業の人も命懸けで神さまのことを求めてほしい。それは人としての道である。キリスト道という道なんです。

「我は道なり、生命いのちなり、真理まことなり」

と言われた。人としての道。人として生きるということは万人共通である。しかも、決して難しいことではない。私は苦勞してこういふところへ来ましたけれども。今日も、

「人が苦勞したものをあなた方は刈り取るだけだ」

という言葉が出てきましたが、そのようにキリストは向こうから無条件に与えたくて与えて仕方がない。そういうお方であるということを知ってほしいんです。

これが教会へ行きますと、なにか窮屈な感じを受ける。

「あれをしてはいけません。これはしてはいけません。お葬式ではこういうふうに振る舞わないといけません」

なんて。厳しい派になりますと、

「お焼香なんかするのはいけません。偶像礼拝ですから、写真の前に礼拝するのはいけません」

と、とにかくうるさいんですよ。それで、私はもうどこにも属しません。在野の人です。こうなれば、誰も私を責めることはできませんから。神さまだけです、責めたいと思えばお責めになりますし。しかし、キリストはそんなことは仰らない。

「おまえを使いたくて仕方がない。おまえをそう簡単に死なすわけにいかない」

と、きつと思っておられると思う。だから私は告白し続けます。とにかく、そういうあらゆる束縛から解き放つて、本当の自由、何ものにも縛られない本当の自由、それをキリストはくださった。それは神さまに仕える自由なんです。御意みこころの中に生きる自由です。そういつたことを私は本当に皆さまに知っていただきたいと思つて、こんなことをやっているわけです。

本当の健やかな生き方

戦後の、特に大学紛争後、いろんな大学改革がいろいろありまして、新しい学部は何をつくったかというところ、「国際何々学部」とか、なんでも「国際」をあたまたに付けた。その次は何が出てきたか。「総合人間学部」です。「総合人間」、つまり全人です。ねらいはいいですよ。しかし、やっていることは何かというと、本当に大事なことはやってませんね。総合人間をちつとも求めていないでしょ。組織的に何か総合のようなふりをしてますけれども、本当に人間を全人たらしめるもの、そこへは来ない。ということはやはり、神さまの領域というのは人が手でふれることができない。客観化できないものですから、誰かが「これだよ。さあどうぞ」と言つて渡すわけにいかないものなんです。生命というものはそういうものですよ。「生命をそこに見せろ」と言つたつて無理でしょ、自然の生命だつて。その本当の生命は学問の及ばないところです。

どんな賢い方々にもやはり、神さまの世界は聖にしておかさずからざるものです。それは向こうから光がくる、啓示がくる。それをただ受けとる。その中に生きる。そういう関係であつてほしい。しかし、そこにはちゃんとロゴスがあります。変な宗教がいっぱいあるけれども、それを見分ける直感を我々は与えられている。我々の常識に、「これは変だな」と思うものはやはり変ですよ。だから、皆さん、私を変だと思われたら、変なんですけれども、全然思われなくてよ、信じておりますのでね(笑)。たとえば、動物なんかがしつぽを振つ

て近づいていく人は悪い人ではないと私は思う。犬が横を向くような人は警戒しないといけないと思いますよ（笑）。やはり、直感的に悟るんだと思う。我々人間も直感的に、「これはあぶない。これは怪しい。これはいかかわしい」とか、見分ける力があると思う。

キリスト教の中で気をつけなければいけないのは、「奇蹟」とかいюものに対する対し方です。キリストみたいにもすごい癒しいやの御業みわざが起ります。だから、癒しということは御業ではあるけれども、やたらと癒し自体を求めれば、それはだめです。本ものの人の祈りによっていつのまにか周りの人が健やかになっていったという。これならいいんですよ。でも、癒し自体を求めて集まってくると、ろくなことがない。また、ただ頭でっかちになって、理屈だけを言って知識だけになっても、これはだめです。そのへんが難しいところですね。

それはやはり、皆さん、年季をつんでいた দিয়ে、健やかな生き方をなさってください。私は本当にキリストによって肉体的には健やかになっていただいたと思っっています。キリストによって私はすべてのことでやる気が出てくる。疲れても必ずまた回復力が与えられるというか、なにか内的なものが湧いてくるような感じがする。もちろん、私は「祈りだけで生きている」なんていうような人間ではありません。疲れたときは酒も飲みますしね。仕事で疲れたら、走りに行つてリフレッシュしたりとか、そういう自然人としての生き方をしている。しかしながら、一番根底で私を生き生きとさせてくれるのは、やはりキリストというお方がいらつしやつて、その方が、

「おまえのことは全部私が引き受けた」と言つてくださるからです。

キリストに出会った人々

その消息をずつと語り伝えてくれているのが実は、ヨハネ伝の13章からです。そこへ入りたいんですが、その前にちょっとヨハネ伝の前の方を申し上げておきます。

ヨハネ伝第1章に総論がある。

「初めに言ありき」

から始まる総論があります。これはヨハネ伝全体の入口であり締めくくり、アルファ（始）でありオメガ（終）です。これは素晴らしいところですよ。そこに、

「律法はモーセを通して与えられたけれども、恩恵めぐみと真理まことはイエス・キリストを通してやつてきた。イエス・キリストという方は神の独り子ふひとりご、懐ふところにいだかれておられるお方、その方だけが神をあらわした」（ヨハネ1・17）

というように書いてある。それから、おもしろいことは、まず出会いがあります。ナタナエルというのがイエスに出会う出会い方、これは1章の後半にあります。ピリポがキリストに出会つてついでに行く。今度はナタナエルをつかまえて、

「ナタナエル、私は素晴らしい人に出会った。イエスという方はメシアだよ」

と言う。そうしたら、ナタナエルは何と言ったかというところ、

「ナザレからろくな者は出やしないよ」

と言うんです。私でいうなら、「河内かわちの八尾やおからろくな者は出やしない」と言うのと一緒です（笑）。そしたら、イエスは、

「あれこそ本当のイスラエル人だ。正直ものだ」

と言って、ナタナエルに会ったときに、

「ピリポがおまえを呼ぶ前に、あなたはあの無花果いちじくの木の下の下にいたね」

と仰った。はるかかなたです。でも、それでナタナエルはびっくりしてしまった。

「あなたは預言者です！」

と言った。

「ナタナエル、おまえは無花果の木の下の下にいたということを言っただけでびっくりしたけれども、やがて私の上に天使たちが上り下りするのを見ることになるよ」

と言われる場面が1章に出てきます。それから今度は、3章にいきますと、ニコデモというイスラエルの学者が夜こっそりイエスのところへやって来る。敬意を表して、

「イエスさま、あなたのなさっている御業みわざは素晴らしい。神さまがご一緒でなければ、こんなことはとてもできっこありません」

と、教えを乞うた。その時、イエスは、

「人は水と霊とによって生まれなければいけない。人は新たに生まれなければ、神の国に入ることはいけません」

と仰った。

「肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である」

ということニコデモにいきなりポンと仰るんです。そしたらニコデモはうろたえまして、「歳としをとってからお母さんのおなかの中にもう一度入るんですか。新しく生まれるとはどういうことですか」

と聞く。即ち、ニコデモにとってはこの地上のことしか頭にないわけですね。イスラエルの教師でありながら、天上のことはわかっていない。それで、キリストはいきなりそれを仰った。それで彼はうろたえるんです。

「人は水と霊とによって生まれなければならない。肉から生まれた者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。私が、新しく生まれなければならないと言ったからとて、驚くにおよばない。風は思いのままに吹いている。どこから来てもどこへ行くかわからない。そのように霊から生まれる、上から生まれる、神さまによって生み出されるというのはそういうことだ」

と。手をつかむこともできない。肉眼で確かめることもできない。しかし、確かに生まれる

という事実。これがなければ人は本当の人ではない、ということを抑ったのがニコデモとの対話です。相手は学者ですね。

そしてその次に現れたのが、このサマリアの女なんです。だから、この出会いを見ても、ナタナエル、それからこのニコデモ、そしてサマリアの女と、このように話が展開していく。そういう見方をなさつても、とてもおもしろいと思う。

ヨハネ伝12章の36節あたりから見ていきますと、これはもう本当にイエスの十字架が近いというぎりぎりのところで展開してくる物語です。イエスはいろんなことをなさるけれども、結局、ユダヤの人たちは信じない。そこでイザヤの言葉がここに引用されている。

「³⁸……主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。主の御腕は、だれに示されましたか。……神は彼らの目を見えなくさせ、その心をかたくなにされた。

というイザヤの言葉が引かれています。

⁴¹イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである。

と。イザヤはイエスのことを語った預言者ですね。⁴⁴節に、

⁴⁴イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。⁴⁵わたしを見る者は、

わたしを遣わされた方を見るのである。⁴⁶わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に來た。⁴⁷わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために來たからである。⁴⁸わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。⁴⁹なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。⁵⁰父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」(ヨハネ12・38〜50)

ここにもよく、イエスのお言葉というものがどういう性質の言葉かということが出ています。

「自分から語っていない。これはすべて父が語れと仰ったことをそのままお伝えしているだけ」

と。イエスは父から遣わされてやってきた。父のことを「私をお遣わしになった方」と呼んでおられます。そういうことがここでわかります。

弟子の足を洗う

それから今度は、弟子の足を洗われたという有名な場面が出てまいります。13章です。

「¹さて、^{すぎこし}過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、

地上のイエスがまた天界へ戻って行かれるその時がいよいよ来たということを悟って、

世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。²夕食のときであった。

既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。³イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御

自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、⁴食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

この3節に、

「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたことを悟り」

とあります。これは非常に重いことなんです。イエスというお方は、「これはいやです」と言う権威があるお方です。「いやです」と言えば断れる^{ことわ}。けれども、それをお断りにならなかった。なぜ、断られるか。これから向かうところは十字架なんです。

十字架というのは罰なんです。何の罰か。神を拒む者^{こぼ}、神さまに背く者^{そむ}、悪事を働いている者、いわゆるこの世の、神に逆らう者たちに対する審判、それが十字架なんです。それを

イエスが断れば、審判は我々にもろに臨む。いつか知りませんが。いつか知りませんが。臨む。少なくとも、私たちにとっては生命への道は断たれてしまう。ところが、イエスが十字架におつきくださると、それによって我々の受くべき審判を全部一身にひつかぶってください。そのぎりぎりのところにイエスは立たされておられる。すべてをイエスの手にお委ねになつていて、ということを知られるわけです。自分は神から出てまた神に帰る。その時が来ているということを知っておられる。こういう事態なんです。

そして今度は、すつくと立ち上がって、弟子たちの足を洗おうとされた。

「なぜ、そういうことをしているのか、それは今はわからないであろう」と仰る。

⁵それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふぎ始められた。⁶シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいるのでありますか」と言った。

足を洗うというのは奴隷の仕事だった。それを「主」「先生」と呼んでいるそのお方が自ら洗いたもうということ、ペテロは驚いたわけです。

⁷イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたにはわかるまいが、後で、わかるようになる」と言われた。⁸ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言う」と

ペテロが、「そんなもつたいたいことを、私は弟子としてお受けするわけにまいりません」と。ペテロは正義感に燃えていますから、先生思いですから、そう言った。ところが、イエスは、「もし、わたしがおまえを洗わないなら、おまえはわたしと何のかかわりもないことになる。おまえとはこうして三年間一緒に暮らしてきた親しい間柄だ。おまえは一番弟子だ。しかし、もし今ここで私がおまえの足を洗わなかつたら、もうおまえとは絶縁だ」

と。足を洗うということは全身を洗うことを指していた。

「私がおまえを洗う、それでおまえは清まる。私が十字架でおまえを洗わなければ、おまえとは関わりがなくなってしまう」

と。ところが、ペテロはそんなことを聞いたものですから、

「そう仰るんだつたら、足どころか全身を洗ってくださいよ」

とまで言い出した。

⁹そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」¹⁰イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いものだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清い。だが、皆が清いわけではない。」¹¹イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

¹²さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまったと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。¹³あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。¹⁴ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならぬ。¹⁵わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(ヨハネ13・1-15)

つまり、あなた方もお互いに仕え合う者になれと。お互いに足を洗い合う。一番汚いところをお掃除するという、そういう仕事をしなさいと、それをここで仰っている。

イエスの弟子であるならば

イエスが去られたあと、弟子たちが残ります。人々の目に映るのは、あれはイエスの弟子だということだけがわかっている。その正体は何だろうか。本当に愛がみなぎっている。互いに足を洗い合っているという姿。本当に彼らは仕え合っている。誰も自分が偉そうにする者はいない。本当にそこに愛のひとつの共同体ができてきている。それによって、

「ああ、これこそイエスの弟子だということがわかる。そのために今、私はこのような模範を示したんだ」

ということを仰るわけですね。そして、31節へ飛びます。

「31さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。32神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。」

「人の子」というのはイエスがご自分のことを呼ばれるときに、「人の子」という言葉を使っておられる。そして、少し飛びまして、34節、

34あなたがたに新しい掟^{おきて}を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(ヨハネ13・31〜35)

世間の人というのは結局、見えるところでしか判断できません。キリスト教会の内実がどんなものであるか、それはそのキリスト教会の方々自身の生活ぶりを見て、「これなら信頼できる」とか、「これはだめだ」とか、そういう判断しかできないわけです。私は、ここでイエスが仰ったことは、

「私があなた方を愛したように、あなた方も本当に互いに愛し合うならば、それによってあなたはイエスの弟子だということを世間の人々はきくと認めてく

れるにちがいない」

と。そういう心で仰ったと思います。15章の方に行きますと、

「人その友のためにその生命を捨てる。これより大いなる愛はない」

とまで仰っている。愛ということをものすごく重んじられた。

わたしの内におられる父

それから14章にまいります。

「1「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。2わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。」

これから場所を用意しに行く。まるで天国に住宅を見つげに行くような、そういうお話です。

3行つてあなたがたのために場所を用意したら、戻つて来て、あなたがたをわたしのもとの迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。4わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。5トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちにはわかりません。どうして、その道を知ることができましようか。」6イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもと

に行くことができない。⁷あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」⁸フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、⁹イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。¹⁰わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。

言葉が父の御業であるというわけです。

¹¹わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。¹²はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。¹³わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。¹⁴わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」(ヨハネ14・1〜14)

と。こういう約束をなされます。

愛によって結ばれている関係

それから次に、「聖霊を与える約束」というところにまいります。

¹⁵「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟おきてを守る。これは愛の掟です。『互いに愛し合いなさい』というのを守る。

¹⁶わたしは父にお願ひしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。¹⁷この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これから、あなたがたの内うちにいるからである。

共におり内うちにいる。やはり、内うちにいてくださらなければ。外そとに捜すのではない。あなたの内うちにいらつしやるお方、内住うちずみのキリストです。

¹⁸わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻つて来る。¹⁹しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きてるので、あなたがたも生きることになる。²⁰かの日には、わたしが父の内うちにおり、あなたがたがわたしの内うちにおり、わた

しもあなたがたの内に入ることが、あなたがたにわかる。²¹わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」

こういう内在関係、内住関係、愛によって結ばれている関係を約束されました。そして、「わたしの言葉の中にとどまっていなさい。言葉の中にとどまっているなら、その言葉と一緒にわたしはいるんだから」

と。言葉と霊は一つなんです。

「わが語りし言は霊なり、生命なり」

という言葉が6章に出てくるけれども、キリストの言というのは単なる言語ではない。言は生命なんです。ヨハネ伝の第1章に、

「この言に生命があつた」

とあります。そういう言は生命をもつ。キリストの語られた言葉というのはそれだけの内実を持っていきます。

²³イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。²⁴わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。

と。

繰り返すこういうことを言っておられます。

²⁵わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。²⁶しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。²⁷わたしは、平和(平安)をあなたがたに残し、わたしの平和(平安)を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。²⁸『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。²⁹事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。³⁰もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼はわたしをどうすることもできない。³¹わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよう。』(ヨハネ14・15〜31)

ここで一旦終わっているんですけども、また話が續くかたちになっています。

まことのぶどうの木

次は15章、「イエスはまことのぶどうの木」というところで、ここもとても大事なことが書かれていますので、要点を見ていきます。

「1」わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。²わたしにつながっているながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れなさる。³わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。⁴わたしにつながっていない。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。⁵わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていないれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。⁶わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。⁷あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。⁸あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それに

よって、わたしの父は栄光をお受けになる。⁹父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。¹⁰わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。」(ヨハネ15・1〜10)

これは有名な「ぶどうの木とぶどうの枝」のお話です。ぶどうの枝というのは確かにぶどうの木としっかりつながっていないければ、切り離されたら枯れてしまいます。私もイエスというお方と一つであるから生き生きしているけれども、この方から離れたら自分の中に生命はない。私のこの右腕は私の体の一部だから何でもできますけれども、これが切り捨てられたら単なる物体になってしまいます。そして腐ってしまいます。そのように、クリスチャンとは何か。

「キリストなしでは何もできない無能力者」

ということです。これをよく覚えておいてください(笑)。キリスト者と何か。キリストなしには何もできない無能力者。けれども、キリストがいてくださるなら、何でもできる。キリストがいらっしゃれば何でもできる。キリストがなさるから。自分の業(わざ)ではない。

ゼロになれない人間

つまり、キリスト者とは何か。自分自身はもう何でもない、何ものでもない、ナッシング、

ゼロです。ゼロにしていた。ゼロになれば、神さまが充滿する。ところが、人間はゼロになれないんです。「無心になるう、悟りをひらこう」と思っても、ムラムラと何か湧いてくる。断食して、おなかがへった。ご馳走が目につかぶとかね(笑)。当然でしょ、生命体というのは。生命を守るためには当然でしょ。

それはまあ体の問題ですけれども、その他、人格というものは己を立てたいんです。これを「肉」と言います。生まれながらの人はみなプライドがあります。「私は」と思っている。それを侮辱されると、もう我慢できない。復讐しようとか。これが人間性なんですよ、本当のところ。

「右の頬を打たれたら、左の頬を向けよ」

なんて、そんなバカなことは人間性に反するんです。だから、あの「山上の垂訓」はみな嫌いなんですね。「右の頬を打たれたら、左の頬を向けよ」とか、

「敵のために祈れ」

とか、そんな弱虫じゃないぞと皆は言う。けれども、キリストは本当に強いお方です。というのは、キリストの右の頬を打って左の頬を叩いたら、その人の手はしびれますよ。それはそうです。日蓮だつてそうだったそうですね。日蓮を斬ろうとしたら、その人の腕がしびれて斬れなかったという逸話が残っている。やはり本当の靈的な存在者、神の靈が充滿している人を斬ろうと思つたら大変です。これは自分の方がやられます。けれども、このイエスと

いう方は御意に従つて自分を献げた。十字架の上で献げた。だから、凄いことなんです。

人間というのは自分に誇りがある。プライドがある。自分をサムシングにしたい。自分を立派にしたい。それは人として当然の欲求です。けれども、それは人の世界でのなしです。こと神さまの前にはイエスという方は本当によつてぶれていた。イエスという方はゼロでした。神がすべてで、「父よ」と呼んだ。

「自分からはなにもしない、何もできない。すべて父なる神がせよと仰ることをする。語れと仰ることを語る。私は自分では無責任だ」

と。無能力者であり、無責任者が、あんなに素晴らしいことをなされた。ところが、我々はそれができない。それは「我」といやつがじやまをします。「業」というやつがじやまをします。それを「肉」という。生まれながらの人間です。ニコデモに仰った、

「肉から生まれたものは肉である。上から生まれなくてはならない。新しい誕生をしなければならぬ」

と。それをこの「肉」というのが妨げている。その我々のどうしようもない「肉」、自我を立てるといふ本性、これは修行ではどうにもならないと私は思いますよ。多分、法然とか親鸞なんかは本当に修行なさつたと思う。最後は弥陀の本願にすがられた。光ある方が現れた。それにすがつた。そのように自分自身で自分を解決できないというのが人間だと思っんです。

我々が受くべき業ごうに対する審判

それをキリストは、

「そうだよ、その通りだよ。私が来たのは世を審くためではない。世を救うためにやって来た。自分はそのために生命を捨てる」

と。十字架の上で生命を捨てる。それは我々が受くべき、「業ごう」に対する審判です。我々の存在そのものが実は神に逆らうという、残念ながらそういう本質なんです。これは認めたくないけれども仕方がない。しかし、それをキリストは我々の責任になさらなかった。

「私は彼らを担いあげる。私は黙って十字架につく」

と。そして、敵対する者どもに十字架の上から、

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分でやっていることがわからないでいるからです」

と、そう言って、執り成しをされた。こういう姿に私はもう本当に頭を下げる。ユダヤ人が何かと、そういうことではない。これは神の子、神の人ですよ。たまたまユダヤ人の中から生まれたお方だけでも、これは本当の人らしい人です。涙があり、悲しみを知り、痛みを知り、実に愛そのものである方。その方が宗教的な理由で迫害された。神の御意みこころを百%に行おうとされた方を人々は迫害した。しかも、宗教家が迫害した。そして、ピラトの許しを得て、十字架につけて殺してしまった。それをキリストは、

「それを全部、私は担う」

と仰った。「彼らを赦してやってください。彼らは自分で自分のやっている事がわからないから」と言われた。あの弟子となつたパウロもそうなんです。ユダヤ教のチャンピオンです。「律法の点については落ち度がない」と、胸を張っていた。それがキリスト教徒を迫害しに、わざわざ大祭司から添え文をもらって、殺害の意気ははずませてダマスコへと向かって行つた。その白昼にキリストが現れた。その光にぶつ倒された。

「サウロ（パウロ）、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

という声が響いてきた。パウロはぶつ倒されて、起き上がつたけれども、目が見えない。ものが言えない。そして、手を引かれて行って、独り静かに祈っていた。そうすると、アナニヤという人のところにキリストが現れて、

「アナニヤよ、サウロというのがあそこで祈っている。まっすぐな道という通りの家にいるから、おまえがそこに行つて、サウロのために祈つてやってほしい。彼は今祈っているから」

と。アナニヤは、

「いや、とんでもない。彼は恐ろしいやつですよ」

「いやいや。そうではない。彼は本当に改心して神の使い、キリストの使いとなるから、おまえは行ってやってほしい」

と。それで、アナニヤはパウロの所へ行つて、手を置いて、

「兄弟パウロよ、おまえにダマスコへの途上で現れたイエスというお方が私にお告げになった。手を按おいてやれと」

そして手を按おいて祈つたら、目が開け、目から鱗うろこのようなものが落ちた。

三日間、パウロは飲まず食わず、そういう生活だった。それは食べられなかったでしょうよ。自分が信じてきたことが根本的に否定されたんですから。しかも、人ではない。白昼に光が現れて、

「あなたは誰ですか」

「おまえが迫害するイエスである」

つまり、弟子たちに対する迫害は私に対する迫害であると言つて、ぶつ倒した。そして彼はひっくり返つた。そのパウロが命懸けで今度は、小アジア半島の人々にキリストを証言して行つたわけです。ペテロはエルサレムで教団をつくりました。パウロは異邦人伝道をやつた。

そういうことで、初代というものがつくられていった。もう、この程度でやめますけれども、私はこういうペテロあるいはヨハネそれからパウロ、そういつた者たちは第一期生だと思ふ。私たちは第何期生か知らないけれども、同質なんです。同窓生なんです。

毎日読む聖書

弟子たちに語られた言葉を私に語られた言葉として受けとる。あなたに語られた言葉として受けとる。「この言葉、いただき！」と、いいとこ取りでも結構ですよ。とにかく、好きな言葉をたくさんもらう。それを豊かな糧かてにする。そうしていますと、今度は聖書を読むのが非常に慕こわしくなってくる。聖書を読んでないと、なにかもの足りない。なにか遠くなつたような気がする。それで、私は遠くなつてほしくないから、一生懸命に毎日、毎日、読みます。自分は文語の聖書ですけれども。もう色塗りにされてしまった聖書です。それとこれからは、新共同訳も読みます。それを照らし合わせながら読みます。本当に、

「わが言ことばは靈いのちなり、生命いのちなり」

と、これで生きるんです。

「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つ一つの言ことばで生きる」

という。その言は本当です。キリストは、生命の危機の中でサタンに仰つた。この世にサタンという悪霊があるので、悪霊が皆さんを惑わして、できるだけ神の言が入らないようにする。これがいなければ、人間は性善説でいいけれども。この悪霊というやつが人間をとつかまえて、できるだけ神さまから退けて悪いことをさせようとする。これをやつつけないといけない。クリスチャンになられたら、毎日毎日お祈りしてください。悪霊どもがキリストから奪い返そうとしますから。足をすくわれぬように。そのためには、聖言みことばを食べること

です。それから毎日、「主キリストさま、ありがとうございます。今日一日、どうぞお守りください」という「主の祈り」があります。

「試みにあわせないで、悪しきものからお守りください」

と。みんなこれは本当ですから。

そういうふうには、一つ一つを自分の生活の中に取り入れて、自分のひとつの生活を作り上げていく。そして今度は、困っている方々に、

「ちょっと。いらっしやい、いらっしやい。ここには素晴らしい温泉が湧いている

のよ」

「ごいっしょ」

なんていうわけです。

「生命の水を与える」

というのは、キリストご自身のことです。キリストは、

「私自身をやるよ。そしたら、あなたは自分で変わるよ。あなた自身が泉だよ。人々を潤していくよ」

と。ああ、ありがたいですね。本当にそれは素晴らしい。これはもう、病める人であろうが、健康な人であろうが、関係ありません。寝たきりでも、微笑みで人を生かします。お金があるなしではありません。本当にその人の人柄そのもの、その人の存在そのものが光を放つ。

そういうふうにはキリストがしてしまわれる。キリストの姿があなたの姿に変わるんです。それがキリストの思し召しです。思し召しは必ず成るんです。

キリストによって人間が救われていくこと

「神の義」とは何か。神の義というのは、キリストによって人間が救われていくこと。これが神の義なんです。ルターはそれに目覚めました。

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」

とローマ書に書いてあります。神の義というのは審く義ではない。救う義である。

「神の御意は、すべて私を信する者が一人も滅びないで永遠の生命を得る、これである」

と。ヨハネ伝に何度も出てきます。

神さまは生命を与えたくてしようがない。そのためにキリストを遣わした。人々はキリストを殺した。けれども、キリストは逆にその十字架の死をもって死そのものを、罪そのものを滅ぼした。罪の力を滅ぼした。そして、生命を与える。一人ひとり霊を与える。そして、たくさんの方々のキリストをつくりだす。キリストの霊をもらった者はキリスト者と言います。「キリストのもの」ということです。

私は、「キリスト教徒」なんていう言い方は嫌いです。キリスト信徒、あるいはキリスト者、

キリストと一緒に生きる者、キリストと一緒に走る者(笑)。キリストと一緒に息している者。それでいい。民族の違い、宗教の違い、そんなものを越えた本当の大空に光輝く、広大無辺な世界に私たちを飛ばたかせてくださる。それがキリストというお方だということです。

ご自分のお家の宗教を大事になさってください。ぶつこわさなくていい。キリストはそれらをみなそれぞれに尊びながら、それ全体を包んで、大空の中で光輝いてくださる、そういう光なんです、生命なんです。人を生かしてくださるお方。そういうお方が皆さんの中に宿つて、くらいついでくださったら、凄いいことになりますよ。来年集まったら、「ここは光輝いて、もう電気はいらない」なんてなことになつてほしいなあと思います(笑)。

祈り

主イエス・キリストさま。今日はこうして、晴れた大空のもと、この素晴らしい法曹会館に皆さま方を呼び集めくださりまして、この昼のひととき、時のたつのを忘れて、あなたが歩んでくださったあの世界、ガリラヤのほとり、大自然の中、そこで聖言みことばを聞くように、あなたのお話を聞かせていただきました。サマリアの女とのあの出会いの場面、本当に慕わしくございます。あなたは至るところにご自身を現してくださるお方。真心から「主よ！」と呼びますれば、「我なり、懼おそるな。心安かれ」と、あなたの方から駆け寄ってきてくださるお方でございます。

我々はどんなに強そうにみえましても、実は弱いものでございます。行き詰まるものでございます。人に語れないことをかかえてしまうものでございます。しかし、あなたはすべてをご存じです。どんなことも、「わかっているよ、わかっているよ」と言つて、私たちの中に入つてくださり、そばにいてくださり、「大丈夫だからね、大丈夫だからね」と励ましてくださるお方でございます。そういう消息を今日ここに告白させていただきました。

どうぞ、ここにお集まりくださった方々お一人お一人それぞれに、ご自分の生活体験に照らし合わせて、またご自分のお育ちになつた境遇に照らし合わせて、それぞれにそれを生かし活用し、ご自分の主イエス・キリストとのとも偕なる生活を築きあげてくださるようにこいねが希い奉ります。

こうしてご一緒にお話を聞くことができましたことを心から感謝し、御名みをたたえつつ、皆さまのお祈りとあわせ、主イエス・キリストの尊き御名によつて、今、御前みに献げ奉ります。アーメン。

(『エン・クリスト』誌第60号2007年10月より転載)